# フィールドネットラウンジ報告書

**企画名**

タカラヅカの中東・イスラーム――宝塚歌劇に見る日本的オリエンタリズム――

**企画責任者**

村山木乃実（東京大学）

**アドバイザー**

黒田彩加（京都大学）

**日時**

2025 年 2 月 7 日（金曜日）午後 1 時 30 分より午後 6 時 15 分

**場所**

東京外国語大学研究講義棟 1 階 101 教室（マルチメディアホール）

プログラム：

13:30-13:35　開会の挨拶：Fieldnet からの挨拶
13:35-13:45　趣旨説明：村山木乃実（日本学術振興会／東京大学）
13:45-14:10　「宝塚歌劇で描かれた北アフリカ」：黒田彩加（京都大学）
14:10-14:35　「宝塚歌劇におけるオリエント」：濱中麻梨菜（東京大学大学院）
14:35-15:00　「宝塚歌劇にみるペルシア」：村山木乃実（日本学術振興会／東京大学）
15:00-15:15　コメント：横山綾香（東京外国語大学大学院）
15:15-15:30　質疑応答
15:30-15:40　休憩
15:40-16:05　「宝塚歌劇にみる中東世界と舞台化粧」：香月恵美子（早稲田大学）
16:05-16:30　「宝塚歌劇団における中東文学の受容：ジェンダーとオリエンタリズムからの視点」：ナグラ・ハフィズ（バンハー大学）
16:30-16:45　質疑応答
16:45-16:55　休憩
16:55-17:10　コメント：横山綾香（東京外国語大学大学院）
17:10-17:30　総合討論
17:30-17:40　閉会の挨拶：村山木乃実（日本学術振興会／東京大学）
17:40-18:15　情報交換会

**実施報告書**

**企画の狙いと成果**

本シンポジウムでは、中東・イスラーム地域を研究対象とし、専門分野を異にする研究者らが、それぞれのフィールドワークおよび資料調査でこれまで得られた知見を活かし、大正時代に日本で誕生し、独特な様式を発展させてきた宝塚歌劇における中東・イスラームの表象の諸相とその社会への影響を検討した。この検討を通じて、宝塚歌劇団が、中東世界の表象において、西洋から投射されたオリエンタリズムの見方を踏襲しながらも、東洋である日本の視点をも反映させていた点を明らかにした。そうして、「日本的オリエンタリズム」と呼びうるものの一例を提示する中で、日本の文化表象研究に一石を投じることを、本シンポジウムでは目的としていた。同時に、本シンポジウムでは、宝塚歌劇における中東・イスラームの表象という共通のテーマで、若手研究者たちが自身の専門領域を超えた研究者間のネットワーキングを行うことも目指された。

本シンポジウムの登壇者として、エジプトをフィールドにするイスラーム現代思想研究者、黒田彩加氏、パレスチナをフィールドとする風刺画研究者、濱中麻梨菜氏、宝塚歌劇の舞台化粧を専門とする研究者、香月恵美子氏、そしてエジプトから日本文学研究者、ナグラ・ハフィズ氏をお呼びした。コメンテーターには、ロシア演劇を専門とする横山綾香氏をお呼びした。黒田氏の報告では、自身のフィールドの観点から、『マラケシュ・紅の墓標』（2005年花組）、『愛と死のアラビア』（2008 年花組）、『アルジェの男』（2019 年星組他）にみる、モロッコ、エジプト、アルジェリアの表象を検討した。濱中氏の報告では、濱中氏自身のフィールド研究と風刺画研究の観点から、『天は赤い河のほとり』」（2018）を取り上げ、漫画と宝塚のそれぞれにおいてどのように古代オリエント、とりわけタイトルにも付されている「赤い河（マラシャンティア）」が描き出されているのかを比較し、マンガと宝塚のメディア・ミックスの意義やその効果について検討した。村山氏の報告では、『シルクロード』（2021）と『金色の砂漠』（2016）で描かれる中東世界を砂漠に着目して考察し、両作品に表現された世界観が、『千夜一夜物語』と『王書』の影響を受けている可能性を指摘した。休憩を挟み、後半部では、まず香月氏による、宝塚歌劇における中東を舞台とする化粧についての報告が行われた。ハフィズ氏の報告では、戦前宝塚歌劇における『千夜一夜物語』の展開、戦後における宝塚歌劇と中東文学の受容、登場人物の演技方法および対話のジェンダー的分析、登場人物の演技方法および対話に見られるオリエンタリズム的表象について論じられた。

時間の都合上、質疑応答の時間を十分にとることができなかったため、香月氏とハフィズ氏の報告にたいする質問のみを受け付けた。香月氏の報告にたいしては、褐色の化粧に関してと、ブラックフェイスにたいする見解を求められた。ハフィズ氏には、『千夜一夜物語』の女性像や、インドよりもなぜ中東世界が描かれる頻度が多いのかという質問も寄せられた。質疑応答の後、コメンテーターによるコメントの後に、総合討論を行った。総合討論では、日本で中東を題材に創作を行う場合、オリエンタリズム的な視点を完全に排除すること

は難しいが、どのような視点で中東を描けばよいのかについて、登壇者間で自身のフィールド研究をふまえながら議論をした。

本シンポジウムは、事前申し込みの時点で 88 名の登録があり、当日も研究者のみならず、宝塚ファンを含む一般の方をはじめ、幅広い層に参加してもらうことができた。イベント後のアンケートでも、「研究者ならではの視点・考察が面白く、あっという間の 6 時間だった」、「宝塚の、ひいては日本のオリエンタリズムについて考えさせられました。実際中東を研究されている方やナグラ先生のような方からお話が聞けて良かった」、「作品とその対象となる地域に基づくシンポジウムは新鮮で興味深く参加しました。地域の研究をしている人だからこそ気づける視点も多く、新しい中東を扱った作品が出たらお話を聞きたいと思いました」といった、前向きなフィードバックを多く得ることができた。

またシンポジウムの目標だった、宝塚歌劇における中東・イスラームの表象という共通のテーマを通じて、研究者間のネットワーキングを行うことも達成された。報告後の情報交換会では、オリエンタリズムが専門の研究者や、フィリピンをフィールドとする文化人類学研究者と、今回のイベントの趣旨や「日本的オリエンタリズム」について意見交換をすることができたほか、今回のテーマを通じて、他のフィールドを専門とする研究者とも交流を図ることができた。オリエンタリズムの議論における「オリエント」とされる地域から、東南アジア地域が捨象される傾向があることを教えていただいた。一方で中東・イスラーム地域を専門とする立場からすると、こうした議論で自身の専門地域は当たり前に「オリエント」に含まれる。そのため、逆に包括されない地域が存在するという重要な視点に気づかされた。ベトナムをフィールドとする研究者とは『舞音』(2015) にみる「日本的オリエンタリズム」について意見交換することができた。この議論を通じて、宝塚歌劇団の作品における、東南アジア世界と中東世界の表象の共通点を確認することができた。

さらに、本シンポジウムを通じて、各報告者は新たな知見を得ることもできた。特に、横山氏のコメントで指摘された、ベリーダンスのようなエキゾチックな要素や『王書』のような古代のモチーフが実際に現地ではどのように受け止められているのかという点は、今後の各報告者の研究を深化させる上で重要だと考える。こうした文化表象が、今回の企画でオリエンタリズムの対象としてのみ扱った地域において、実際にオリエンタリズムとの関係においていかに形づくられ、批判されてきたのか、あるいは反転されてきたのか。このような実態を分析する視点をそれぞれが自身の専門研究やフィールド調査で活かすことで、さらなる研究の発展が期待される。

**今後の課題と活動計画**

参加者のアンケートを通して以下の課題を発見することができた。

第一に、報告者の報告時間が大幅に超過してしまい、予定していた前半のコメントと質疑応答の時間を削ったことは大きな反省点だった。この点については、司会だった企画者

がタイムキーパーの役割を果たしていなかったことが原因である。また、アンケートでは室内が寒かったとの意見もあった。今後は、シンポジウムの進行のみならず、会場設営・管理を含めたシンポジウム全体に目配りをする必要があると考える。

第二に、報告方法に関して、動画を使用してもらいたかったというフィードバックを参加者から得た。研究者向けの研究報告であれば、動画を使わなくとも問題がなかったと思われるが、今回のように、一般の方の参加も見込んだ企画であれば、動画を使用した方が、より分かりやすく説明ができたのかもしれない。ただし、動画の使用には著作権が関わる。次回企画する際は、著作権を事前に確認し、問題がなければ検討したい。

第三に、報告内容についても課題が残った。参加者からは、「当事者（演者、演出家やスタッフなど）に聞き取りをした報告があれば良かった。過去の記事の網羅はよくやったと思うが、それだけだと「誰が調べても同じ」という感じで、報告者独自の考察が感じられなかったし、フィールドワークになっているとも思えなかった」という意見が寄せられた。このアンケートでの「フィールドワーク」が、宝塚歌劇に関わる現地調査や聞き取り調査という意味でのフィールドワークを指すのであれば、本企画における「フィールドワーク」の意味、つまり各報告者が専門とする地域でのフィールドワーク調査を誤って理解しているといえる。ただし、今回の企画での報告も含め、これまでの宝塚歌劇についての研究も、資料調査を主としていることから、宝塚歌劇に関わる現地調査や聞き取り調査を入れるという視点は新しい。今後は、各報告者が専門とする地域のフィールドワークのみならず、宝塚歌劇を対象とした調査も行うことで、新たな分析視点を提示できると考えている。

加えて、参加者からは「作品タイトルには表れないけれども中東・イスラーム世界を描いたものは探せば意外とある」という声も寄せられ、中東が描かれた宝塚の作品を再度調べ直し、分析の検討をし直す必要性を感じた。今後は登壇者同士で協力し、作品の再調査や再検討を進めていく計画である。定期的にオンラインで研究の進捗を報告し合い、各自、今回の報告内容のブラッシュアップを行う。練り直した研究内容は、論文あるいはリサーチペーパーとして公開したい。

**各報告の要旨**

**黒田彩加（京都大学）「宝塚歌劇で描かれた北アフリカ」**

黒田氏の報告では、自身のフィールドの観点から、『マラケシュ・紅の墓標』（2005 年花組）、『愛と死のアラビア』（2008 年花組）、『アルジェの男』（2019 年星組他）にみる、モロッコ、エジプト、アルジェリアの表象を検討した。報告を通じて、これらの作品が、19～20 世紀の列強の進出を背景につくられた西洋的視点の作品や、既存の文学・映画からのインスピレーションによって創作されたことが明らかになった。また、上記の宝塚の作品の舞台は北アフリカであるものの、その舞台の主人公は西洋人であることにも黒田氏は言及した。これについては、地理的な遠さもあることから、観客が感情移入しやすい西洋人

の主人公としての可能性も示唆された。現実世界との齟齬はあるが、宗教や民族を超えた友情を描いたり、白人からベドウィンへの多様なまなざしを描いたりするなど、脚本家の慎重な姿勢も見られると黒田氏は述べた。

**濱中麻梨菜（東京大学大学院）「宝塚歌劇におけるオリエント」**

濱中氏の報告では、濱中氏自身のフィールド研究と風刺画研究の観点から、『天は赤い河のほとり』」（2018）を取り上げ、漫画と宝塚のそれぞれにおいてどのように古代オリエント、とりわけタイトルにも付されている「赤い河（マラシャンティア）」を描き出しているのかを比較し、マンガと宝塚のメディア・ミックスの意義やその効果について検討した。宝塚版『天は赤い河のほとり』においては、古代オリエントを戦乱の世とし、それを平和に暮らせる日本と対置させた形で描き出していることを濱中氏は提示した。「マラシャンティア」とは、ヒッタイト時代の呼び名で「赤い河」を指す。宝塚版では、カイルがユーリとともに目指す「平和な国作り」におけるひとつのキーワードとして機能していることに言及した。これは濱中氏によれば、原作の世界観を「マラシャンティア」という言葉とともに具現化した、宝塚版の『天は赤い河のほとり』だと言える。それが少女漫画と宝塚の融合、すなわちメディア・ミックスによって可能になったことのひとつであることを提示した。

**村山木乃実（日本学術振興会／東京大学）「宝塚歌劇にみるペルシア」**

村山氏の報告では、『シルクロード～盗賊と宝石～』（2021）と『金色の砂漠』（2016）で描かれる中東世界を考察した。村山氏によれば、『シルクロード』で描かれる「中東」は、砂漠と『千夜一夜物語』におけるペルシアで構成されている。このショーにおいて、あたり一面砂の砂漠のイメージと、シルクロードにおけるアラブ世界のイメージはむすびつく。砂が舞う空間が時空をも超えうるという点で幻想的である一方で、『千夜一夜物語』の世界観に支えられたペルシアは、無慈悲な王とそのまわりに侍る美女で表現されていることを指摘した。その一方で、『金色の砂漠』では、砂漠の世界を背景に、ペルシア文学の要素、とりわけ『王書』の影響を確認することができると村山氏は述べた。報告の最後には、イランを含む中東一帯の礫砂漠の存在にも触れた。

**香月恵美子（早稲田大学）「宝塚歌劇にみる中東世界と舞台化粧」**

香月氏の報告では、まず、宝塚における中東を舞台にした作品は、実際の中東世界を描いてはおらず、長きにわたり「神秘的」「夢幻的」といったイメージによってステレオタイプな中東表象がされてきたことに言及した。『ブルー・ジャスミン』（1983）におけるカシムのような「野性的な男性像」は中東に対するエキゾチシズムから生み出されたものであるが、宝塚で上演するにあたり、カシムは『風と共に去りぬ』（1977 年初演）のレット・バトラーや『あかねさす紫の花』（1976 年初演）の中大兄皇子といった国も時代も異なる作品に登場するキャラクターと共通項を持つ役どころとして受け入れられ、男役像の

一つとして類型化されていったという。香月氏によれば、レット・バトラーや中大兄皇子といった役柄はあくまでも男役が演じる役どころであり、現実の男性を手本にしたものではなく、そうした役柄と並列されるカシムもまた現実のアラブ人男性の再現ではない。こうして、エキゾチシズムから生み出された「野性的な男性像」は宝塚版ではエキゾチックな魅力だけではなく、『うたかたの恋』（1983 年初演）の皇太子ルドルフのような貴公子的な役どころに対抗することができる魅力的な男役像として打ち出されたと香月氏は述べた。カシムのように「褐色の化粧」をしたアラブ人男性の表象がエキゾチシズムの再生産になるという側面は否定できない。しかし、宝塚の男役はステレオタイプなイメージに基づきアラブ人男性の再現を試みたわけではなく、つけまつ毛やアイシャドウを用いた華美な舞台化粧によって現実のアラブ人男性とは異なる、虚構の男性像を舞台に出現させた可能性に香月氏は言及した。宝塚の歴史において、こうした野性的な男役像と「褐色の化粧」は深く結びついており、それは宝塚における男役のレパートリーの創出にも寄与してきた。香月氏によれば、それらはすべて現実の男性に寄せた表象ではなく、現実離れした華美な舞台化粧や衣装と共に作り出される、宝塚の舞台においてのみ現れる虚構の男役像であるといえるという。

**ナグラ・ハフィズ（バンハー大学）「宝塚歌劇団における中東文学の受容：ジェンダーとオリエンタリズムからの視点」**

ハフィズ氏の報告では、戦前宝塚歌劇における『千夜一夜物語』の展開、戦後における宝塚歌劇と中東文学の受容、登場人物の演技方法および対話のジェンダー的分析、登場人物の演技方法および対話に見られるオリエンタリズム的表象について論じられた。結論として、宝塚歌劇は異文化要素の折衷とジェンダー表現の両義性を通じて、日本の近代と大衆文化に独自の影響を与えてきた存在であること、その作品や演出が示す多層的な意味は、文化的同化、ジェンダーの固定観念への挑戦、そして歴史的背景を反映したオリエンタリズムの批評的再考を可能にしていること、これらの視点を通じて、宝塚歌劇が単なるエンターテインメントにとどまらず、社会的・文化的な問いを提示する場であることが明らかにされた。